

F. マイヤーと伝統的ホロコースト史学の崩壊 マイヤー・ピペル論争から

加藤 一郎*

F. Meyer kaj la disfalo de la tradicia holokaŭsta historiografio - el la diskuto inter F. Meyer kaj F. Piper -

KATO Içiro

Resumo: En majo de 2002, F. Meyer, la eks-redaktoro de la germana revuo "Der Spiegel", publikis la artikolon "Die Zahl der Opfer von Auschwitz". En tiu ĉi artikolo li kritikis la vidpunktojn de la tradicia holokaŭsta historiografio pri la nombro de la viktimoj de la koncentrejo Auschwitz/Birkenau. Recenzinte la tiun ĉi artikolon, F. Piper, la direktoro de la historia departemento de la Auschwitz muzeo, kondamis lin kiel la revizioniston. Post ne longe, F. Meyer kontraŭkritikis la recenzion de F. Piper. En tiu ĉi diskuto, F. Meyer adoptis la revisionistajn metodojn kaj analizojn, dum F. Piper defendis la tradician holokaŭsta historiografion. Tiu ĉi diskuto klarigis la disfalon de la tradicia holokaŭsta historiografio.

はじめに

アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所は、そこで実行されたとされる「大量ガス処刑」とともに、今日にいたるまで、いわゆる「ホロコースト」の象徴である。

アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所についての伝統的ホロコースト史学（ホロコースト正史）の「教義」の骨格は次の2点から成り立っている。

アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所では、数百万人（400万人（1990年までのビルケナウの記念碑碑文）、約150万人（フランス人研究者ヴェレル G. Wellers）、約110万人（アウシュヴィッツ博物館歴史部長ピペル F. Piper）、約150万人（1995年に立て替えられたビルケナウの記念碑碑文）、約100万人 - 60万人（フランス人研究者プレサック J.-C. Pressac）が殺戮され、その大半がユダヤ人であった。

そして、そのような大量殺戮は、チクロンBという害虫駆除剤を使った殺人ガス処刑によって行なわれ、その大量ガス処刑の中心はビルケナウの4つの焼却棟であった。

この2点は、密接不可分な関係にある。すなわち、「殺人ガス室」を備えた焼却棟という「大量

* かとう いちろう 文教大学教育学部学校教育課程

殺戮装置」(プレサックの表現)が存在しなければ、「大量殺戮」自体が不可能であるし、「大量殺戮」が行なわれなかったとすれば、「大量殺戮装置」も必要ないからである。近年、修正主義者の実証主義的研究の圧力を受けて、伝統的ホロコースト史学の中でもアウシュヴィッツの犠牲者数は大きく下方修正されてきているが、「大量ガス処刑」がとくにビルケナウの4つの焼却棟で実行されたとする教義の骨格は依然として維持されている。

そのような中で、2002年5月、ドイツの『シュピーゲル』誌前編集長フリットフ・マイヤー(Fritjof Meyer)が、『東欧(Osteuropa)』誌上に、「アウシュヴィッツの犠牲者の数：新しい文書資料による新しい見積もり(Die Zahl der Opfer von Auschwitz. Neue Erkenntnisse durch neue Archivfunde)」¹と題する論文を発表した。

このマイヤー論文(以下マイヤーとする)は、アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所でも「殺人ガス処刑」が行なわれたこと、すなわち、アウシュヴィッツ・ビルケナウには「殺人ガス室」が存在したことを認めつつも、アウシュヴィッツの犠牲者数を大きく下方修正する(アウシュヴィッツでの犠牲者約50万、うちガス処刑の犠牲者356000名)と同時に、「殺人ガス処刑」はビルケナウの焼却棟ではなく、ビルケナウ収容所外の農家を改築した2つの「ブンカー」で行なわれたと論じた。

マイヤーがそのように意図していたかどうかは判断できないが、彼の新説は、アウシュヴィッツについての伝統的ホロコースト史学の「教義」の骨格を根本的に動揺させるものであった。犠牲者数を少なくして、「虐殺センター」としての焼却棟の機能を否定してしまえば、アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所に関する伝統的ホロコースト史学の「教義」=「アウシュヴィッツ絶滅収容所物語」(大量の囚人がベルト・コンベア式に焼却棟の地下のガス室に押し込められて、ガス処刑され、その死体は焼却棟の炉室の中で連続的に焼却され、灰と化していくという物語)が崩壊してしまうし、ひいては、ホロコーストの「象徴」たる「戦艦アウシュヴィッツ」が沈没してしまうことになる、すなわち、戦後半世紀以上にわたって伝統的ホロコースト史学が寄って立ってきた基盤が一挙に失われてしまうことになるからである。

従来、伝統的ホロコースト史学に対する学術的・歴史学的批判は、とりわけ、ホロコースト修正主義に対する過酷な政治的・法的処置を講じているドイツでは、公の舞台に登場することはなかったし、もし登場したとしても、その著作・論文は発禁処分か没収処分を受けてきた。この意味で、マイヤー論文は、伝統的ホロコースト史学と完全に訣別しているとはいえないとはいえ、修正主義的な見解を公に表明した初めての論稿であった。

このために、危機意識を持ったアウシュヴィッツ博物館歴史部長ピペルは、マイヤー論文への書評²を執筆して、マイヤー説を修正主義と同一線上にあるものとして次のように断罪した。(以下引用文中の強調下線は引用者による)

「マイヤー論文は、ナチのジェノサイド過程でのアウシュヴィッツの役割を低め、絶滅問題を技術のレベルにまで落としこめる試みである。あらゆる傾向の修正主義的歴史家たちは、これまで、まったく同じことを繰り返して行ってきた。これは偶然なことではない。」

かつて、フランス人研究者プレサックは、1989年に『アウシュヴィッツ：ガス室の技術と作動』を発表して、一時期、「修正主義を最終的に論駁することに成功した」寵児として伝統的ホロコー

スト史学のあいだでもはやされたが、その「隠れ修正主義」的見解が次第に明らかとなっていくと、ピペルたちによって「破門宣告」を受け、昨年、さびしく他界していった。

マイヤーも、やはりピペルから修正主義者と同一線上にあると「破門宣告」を受けたのであるが、プレサックとは異なって、ピペルの批判に果敢に反撃した。彼の反批判「ピペルへの回答」³（以下マイヤー とする）は、ピペルの批判が自分の論文を詳細に批評してくれた「最初の真剣な批判」であるとの謝意を表しつつも、ピペルの批判の中身については、それを受け入れることを毅然と拒否している。

「もし私が自分の結論のうちいくつかに疑問を持っていたとすれば、彼はこの分野での専門家であるのだから、彼の批判はその疑問を払拭してくれるはずである。しかし、彼の反論はどれ一つとして説得的ではない。だから、私は自分の研究には十分に根拠があるとみなしている。」（マイヤー）

後述するように、このマイヤー・ピペル論争の背景には、政治的・物理的迫害を受けつつも、1980年代から今日まで着実に積み上げられてきた修正主義者の研究蓄積がある。本小論は、アウシュヴィッツの犠牲者=400万人説、アウシュヴィッツ所長ヘスの証言、「殺人ガス室」の実在性、修正主義への姿勢という4つの論点でのマイヤー、ピペルの見解を検証することを通じて、彼らの見解と修正主義者の見解との異同を分析し、修正主義者の研究蓄積に直面して、伝統的ホロコースト史学が今日どのような状態にあるのか明らかにすることである（マイヤー・ピペル論争の論点の大半は、マイヤーが焼却棟の焼却能力の見積もりにもとづいてアウシュヴィッツの犠牲者数を算出しようとしたために、その見積もり 実際の焼却能力、稼働日数、稼働可能性 の妥当性に費やされている。この点については、すでに修正主義者のマッソーニョが詳細に検討しているので⁴、本小論では立ち入らない。）

1 アウシュヴィッツの犠牲者=400万人説をめぐって

アウシュヴィッツの犠牲者=400万人説の起源は、ソ連・ポーランド調査委員会が1945年前半に作成した専門家報告にある。1945年2-3月にかけてアウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所を調査した同委員会は、ドイツ側の文書資料が廃棄されているために正確な犠牲者数の算出は困難であるとしながらも、焼却棟の焼却能力、焼却棟の稼働期間および稼働可能性をきわめて誇張したかたちで操作した上で、約400万人という数字を「算出」し、この数字が、ニュルンベルク裁判の席上でソ連検事スミルノフの手によって披瀝された⁵。

まず、マイヤーは、この400万人説を、まったくのソ連側の「戦争宣伝」であったとしりぞけている。

「1945年、ソ連調査委員会は、アウシュヴィッツ・ビルケナウの民族社会主義者労働・絶滅収容所での犠牲者数を400万人と算出した。しかし、この数字は戦時中の宣伝であった。」（マイヤー）

そして、戦争宣伝に由来する400万人という数字は、ドグマとなり、東側諸国では、この数字に疑問を呈することは長らく禁止されていたという、アウシュヴィッツ国立博物館文書館（APMO）主任研究員ヴァツワフ・ドルゴボルスキ（Waclaw Dlugoborski）の次のような発言を引用している。

「終戦直後、ソ連の調査委員会は、調査することなく、400万人という数字を確定した。この見積もりが正確であるかについては当初から疑問が生じていたけれども、それはドグマになっていった。1989年まで、東ヨーロッパ諸国では、400万人という犠牲者数に疑問を呈することは禁止されていた。この数字に疑問を呈したアウシュヴィッツ・メモリアルの職員は、懲罰委員会にかけると脅迫された。」（マイヤー）

これに対して、ピペルは、400万人という数字は、1945年当時の研究・調査水準を反映したものであり、意図的な「戦争宣伝」ではなかった、とソ連・ポーランド調査委員会を擁護している。

「われわれは400万人という数字をアウシュヴィッツでの実際の人的損失を反映している数字として受け入れるべきである。この数字は、ソ連・ポーランド調査委員会のメンバーの最良の知識、のちには、検事側調査官とさまざまな出版物の著者の最良の知識に由来するものであった。…ドイツ側が保管していたアウシュヴィッツに関するもっとも重要な統計資料が欠けていたために、歴史家たちは犠牲者の数を研究することが実際上できなかった。…したがって、ナチスの犯罪を戦時中の宣伝の道具、敵愾心を煽る手段とみなす理由はまったくなかった。一つのことだけにはまったく疑いの余地がない。当時、アウシュヴィッツの犠牲者の正確な数字を誰も知らなかったし、知りえなかったのである。」

マイヤーは、400万人という非常に誇張された数字が登場した原因を資料不足によるとするピペルの弁明を次のように鋭く批判している。

「委員会の調査結果がこのような乏しいことを、たんに情報の欠如によって説明することはできない。民族社会主義者はカチン事件の調査に国際赤十字のような外国人専門家を招待しているが、ソ連は、アウシュヴィッツの調査についてはそのようなことを行っていない。委員会は、戦争難民局報告のような西側の情報資料をまったく無視した。さらに、赤軍は、中央建設局資料、収容所死亡記録、収容所長の指令など、127000以上の文書を含む収容所全体の文書資料を捕獲した。調査報告によると、ロシアの内務省は、収容所の解放直後に、これらをポーランドに返還した。しかし、ピペルによると、こうした証拠資料は『解放以前に破棄された』というのである。

ソ連調査委員会には、ルイセンコのような山師に加えて、カチン虐殺事

F. マイヤーと伝統的ホロコースト史学の崩壊

件を調査して、それをドイツ側のせいとした二人の人物が入っている。さらに、ソ連は、マイダネクとトレ布林カの死者の数をすでに誇張していた（前者を150万、後者を300万と主張していた）。すでに、1944年12月、イリア・エレンブルクは、ユダヤ人犠牲者600万人という数字をあげ、ドイツ人に拘束されていたユダヤ人すべてが、殺されたと述べている。そのとき以来、二世代にわたって、この600万人という恐ろしい数字は、『犯罪者国家』ドイツを殴り倒す修辭的『棍棒』（マルチン・ヴァルザー）として使われてきた。だが、こうした大規模な虐殺をドイツ民族全体に帰することはできないはずである。今なお続いている戦争宣伝なのである。」（マイヤー）

上記に引用したマイヤーのテキストは、ことアウシュヴィッツの犠牲者 = 400万人説に関して、マイヤーが、完全に伝統的ホロコースト史学と決別し、修正主義者の見解に同調していることを意味している。マイヤーの所説を伝統的ホロコースト史学および修正主義の所説と比較しながら、整理すると以下の諸点が確認できる。

アウシュヴィッツの犠牲者 = 400万人説は、資料不足による「不正確な」数字（= 伝統的ホロコースト史学⁶）ではなく、ソ連側の「戦争宣伝」目的にもとづく数字（= 修正主義）であった。

アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所に関する文書資料の大半は破棄された（= 伝統的ホロコースト史学）ではなく、ソ連側は1945年時点で、アウシュヴィッツ中央建設局の文書資料も含む、大量のドイツ側資料を入手していた（= 修正主義）。

ソ連側は、ドイツがカチン事件で行なったような中立的な法医学的調査をアウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所に対しては行っていない（= 修正主義⁷）。

ソ連調査委員会には、カチン事件をドイツ側の犯行と断定したメンバーが含まれており、その報告書は、まったく信頼するに足りない（= 修正主義）。

ホロコーストの犠牲となったユダヤ人 = 600万人という数字も、戦後の人口統計の研究調査結果から出てきたもの（= 伝統的ホロコースト史学）ではなく、そのような調査がなされるまえに、すでに登場してきている（= 修正主義）。

2 アウシュヴィッツ所長ヘスの証言について

アウシュヴィッツ所長ルドルフ・ヘスの証言、「自白」、「回想録」（以上一括してヘス証言とする）は、伝統的ホロコースト史学の中では、アウシュヴィッツ・ビルケナウでの「大量ガス処刑」を立証する第一級の証拠とみなされており、今日にいたるまで、アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所「絶滅物語」は、おもに彼の証言にもとづいて物語られている。

マイヤーは、ヘス証言が拷問・脅迫のもとで作成されたことを認めている。

「収容所長ヘスは強制されて、300万人という数字をあげたが、のちにそれを否定している。」（マイヤー）

「3日間も眠ることを許されず⁸、答えるごとに、拷問を受け、殴られ⁹、裸のまま放置されアルコールを強制的に飲まされたのちに、⁹圧倒的証拠』が突きつけられるなかで、最初の尋問が行なわれた。」(マイヤー)

「1946年4月1-2日の尋問で、ヘスははじめは110万人が殺されたと述べ、ついで、250万人が殺されたと述べた。ポーランドに送られ、処刑されると脅迫されて¹⁰、ヘスはニュルンベルク軍事法廷ではこの数字に固執した。すなわち、300万人の犠牲者があり、そのうち、250万人が『ガス処刑されて、焼却された』というのである。」(マイヤー)

一方、ピペルは、ヘスに対する拷問の事実の詳細には立ち入らないで、ただ、ヘスには、ニュルンベルク軍事法廷やポーランドでの法廷で、それまでの自分の証言を翻す、もしくは訂正する機会があったはずであったと述べるにとどまっている。

「...マイヤーは、アウシュヴィッツでの犠牲者数問題に関係のない事柄での明らかな誤りやミスを引用することで、ヘス証言の信憑性をまったくおとしめようとしている。また、マイヤーは、イギリス軍による尋問のもとでヘスが提示した犠牲者数が殴打、ウオッカ、眠らさないことによって強制的に引き出されたことを言及し、そのことを強調している。しかし、ヘスには国際軍事法廷やポーランドの法廷で自分の証言を訂正する機会が十分にあったにもかかわらず、彼はそのようなことをまったく行っていない。この事実を、マイヤーは伝えていない。」

ピペルは、何と、ヘスには勝者による「見世物裁判」で自分の発言を撤回・修正する機会が十分にあった、それをしなかったのは、彼の証言、自白が真実である証拠であると考えているのである。マイヤーも次のように憤っている。

「ピペルは、『...ヘスには、ニュルンベルクの国際軍事法廷とポーランドの法廷で自分の証言を訂正する機会が十分にあった』と述べているが、それは、ヘスが置かれていた窮状を無視してしまっている考え方である。彼を逮捕した人物たちは、ヘスをポーランドに移送する [実際にそうなった]、彼の息子をシベリア送りにすると脅迫していた。」(マイヤー)

ヘス証言に関するマイヤーの所説を伝統的ホロコースト史学および修正主義の所説と比較しながら、整理すると以下の諸点が確認できる。

アウシュヴィッツ所長ヘスは、自発的に自分の犯罪を自白した(=伝統的ホロコースト史学)のではなく、たえざる拷問と脅迫のもとで虚偽の証言を強要された(=修正主義)¹¹。彼に拷問と脅迫が加えられていたことは、パトラーの著作『死の大隊』からも明白である(=修正主義)。

3 「殺人ガス室」の実在性について

伝統的ホロコースト史学によると、アウシュヴィッツ・ビルケナウでは、ブロック11の地下室、アウシュヴィッツ中央収容所（アウシュヴィッツ）の焼却棟（焼却棟）、ビルケナウ収容所の焼却棟、および収容所外の農家を改造したブンカー1、ブンカー2、計8箇所です。「ガス処刑」が行なわれ、その中でも、焼却棟とが「大量ガス処刑」のセンターであったことになっている。マイヤーは、この正史を、屈折した難渋な表現で否定している。

「ここでは、現存の文書資料、すなわち、もともとはそのようには作られていなかった建物に（投入口、ガス検知装置など）をつけることによって『ガス室（Vergasungskeller）』に改造することに関する文書資料、ならびに、それに関連する目撃証言は、焼却棟の完成 1943年初夏 ののちに、死体安置室を大量殺戮のために利用できるかどうかを調べるために、1943年3月/4月に行なわれた実験のことを指し示していることについては、立ち入らない。この実験は失敗したにちがいない。換気が効果的ではなかったし、予想された大量の犠牲者が次の11ヶ月にはやってこなかったからである。実際に殺戮が行なわれたのはおもに、収容所の外にある農家を改造した二つの小屋であった。第一の家、すなわち『白い家』もしくは『ブンカー』の土台はつい最近発見されたばかりである。」（マイヤー）

これに対して、ピペルは、修正主義者が問題提起してきた「殺人ガス室」をめぐる技術的建築学的諸問題（チクロンBの投下方法、換気装置、死体搬出方法など）に立ち入ることに極力避けようとする姿勢をとっている。

「技術的条件では、ガス室はまったく単純な装置であった。それは、閉ざされた空間に毒ガスを投入するという原理にもとづいて稼動した。どのような建物、可動式の施設であっても、この目的に使うことができた。…おもに、すべての開口部をふさぐというようなちょっとした改造を行なえば、どのような部屋であっても、ガス室に転用することができる。」

このピペルの立論はまったくの論点のすり替えである。「殺人ガス室」をめぐる論点は、「目撃証人」が述べているところのベルト・コンペア式の「大量ガス処刑」、すなわち、数千の犠牲者を数分で殺戮し、そのすぐあとで、犠牲者の死体をやはり短時間で室内から除去するためにはどのような設備・施設が必要となるか、そのような施設に焼却棟の死体安置室が適合しているかどうかであり、ピペルのように、「すべての開口部をふさぐというようなちょっとした改造を行なえば、どのような部屋であっても、ガス室に転用することができる」かどうかではないからである。ちなみに、半世紀にわたって「殺人ガス室」の技術的・化学的問題の検討を怠ってきた伝統的ホロコースト史学の研究者は、この問題を追及されると、かならずピペルのような姿勢をとる。マイヤー・ピペル論争では、シアン化水素ガスを使った「殺人ガス室」が問題となっているが、

一酸化炭素を使った「殺人ガス室」をめぐる論争でも、修正主義者が、一酸化炭素の量の少ないディーゼル・エンジンの排気ガスは「大量ガス処刑」には不適切ではないかと疑問を呈すると、伝統的ホロコースト史学の研究者は、「二酸化炭素でも人を殺すことはできる」、「もし殺せないというのなら、ディーゼル自動車の排気ガスを引き込んだホースを口にくわえてみる」というような「反論」をかみならず行なうのである。

また、ピペル論文には、「ガス室」という単語が頻繁に登場しているものの、彼が、この「ガス室」の具体的構造について触れているのは次の一箇所だけである。

「焼却棟の地下室は、この施設が稼動したときから、ガス室として使われていた。この機能は、この建物のもっとも初期の計画、遅くとも1942年1月以前の計画に存在している。この時期の焼却棟 と の青写真には、1つではなく2つの地下室が描かれている。その1つはもう1つの部屋の2倍であり、異なった換気装置を持っている。1つの部屋（脱衣室）は、排気装置だけを持っていた。もう1つの部屋（ガス室）は脱衣室の半分の大きさであるにもかかわらず、2倍の強制換気装置を持っていた。」

焼却棟 の地下にある2つの死体安置室1、2の大きさとそこに設置されている換気装置に関する文章であるが、この文章は、ピペルが「殺人ガス室」をめぐる技術的建築学的問題にまったく無知であることを示している。なぜならば、後述するように、また、マイヤーにも指摘されているように、死体安置室1（「殺人ガス室」）の換気能力は、死体安置室2（「脱衣室」）よりも低いからである。

そして、ピペルは、「殺人ガス室」の技術的建築学問題については触れることなく、というよりも、上記の文章からも明らかとなっており、まったくこの件については無知であるために、プレサックの研究によって「殺人ガス室」の実在性は立証されていると断言する。

「マイヤーが再三引用している研究者の一人はプレサックである。彼は薬剤師として教育を受け、アウシュヴィッツ強制収容所のガス室と焼却棟の建設と稼動に関する2つの著作を執筆した。プレサックの研究は、ドイツ側資料、とくに青写真の分析を通じて、アウシュヴィッツ強制収容所におけるガス室の実在を、まったく疑いの余地なく立証した。」

ピペルは、プレサックの研究によって「殺人ガス室」の実在性が、「疑いの余地なく立証された」と断言しながらも、「殺人ガス室」に関するプレサックの立論について具体的に言及しているわけではなく、焼却棟の死体処理能力、ハンガリー系ユダヤ人の移送者数についてのプレサックのあげている数字を否定的に言及しているだけである。そして、プレサックの研究については、上記の「まったく疑問の余地なく」立証されているという箇所を除けば、きわめて批判的である。

「不幸なことに、プレサックは、ドイツ側資料も含む多くの文書資料に不信の念を抱いているために、しばしば、誤った憶測におちこんでいる。……」
「マイヤーは、焼却能力に関する1943年6月28日の文書の内容に疑問を呈

F. マイヤーと伝統的ホロコースト史学の崩壊

している。彼はプレサックを引用しているが、プレサックは根拠もなく、この文書のことを『SS内部の宣伝目的の嘘』と呼んでいる。」

「プレサックの研究は、それが提示している典拠資料（青写真、文書、証言）の面で大きな価値をもっている。しかし、彼の結論はしばしば矛盾している。概して、プレサックは、犠牲者の数を減らし、焼却棟とガス室の処理能力を低く見積もり、決定や行動がなされた時期をあとに遅らそうとしている。」

「プレサックの恣意的な見積もりでは、残りの二つの焼却棟、すなわち、と の処理能力は1日1500体である...」

ピペルは、一体どのような根拠で、自分自身が否定的な評価を下しているプレサックの研究によって、「殺人ガス室」の実在性が「まったく疑問の余地なく」立証されていると考えているのであろうか。不可解である。

これに対して、マイヤーは、プレサックが「殺人ガス室」の実在を証明する「犯罪の痕跡」としてあげた「証拠」にさえも批判的である¹²。

「プレサックは、シャワーヘッド（彼はこれを偽物とみなしているが）のことを『ガス室の実在の絶対的で反駁できない証拠』とみなしている。『ガス気密ドア』も同じ発注書に入っており、プレサックは、ガス気密ドアは殺人ガス室との関連でしか使われえないと考えているからである。リップシュタットも『ホロコーストの否定』の中で、『一体どうしてシャワー室にガス気密ドアが必要なのであろうか』と反問している。しかし、クルカノクラウスは、『死の工場』（ベルリン、1957年、71頁）で、サウナについて次のように述べている。

『ビルケナウでは、この浴場は、気密ドアを介して2つの区画に分けられていた。』

害虫駆除バラック用の22の『ガス気密』ドアの発注書 上記のサウナ用の2つのドアも含む がモスクワの文書館で見つけられている。（マイヤー）

つまり、プレサックが「殺人ガス室」の実在性の証拠としてあげている「ガス気密ドア」は、害虫駆除室にも使われているので、「ガス気密ドア」の存在は、その場所が「殺人ガス室」であったことを示す証拠ではないというのである。

また、マイヤーは、焼却棟 と の死体安置室1、2の換気装置問題についても、上記のピペル説を批判している。

「チクロンBを使った殺人ガス処刑は、焼却棟の建設が始まったときには予定されていなかった。もし予定されていたとすれば、実験が始まったとき、毒の丸薬を投入するために、死体安置室の天井をあとから改築して、穴を開けるようなことは必要ではなかったことであろう。ピペルは、死体

安置室Bの排気装置が、2倍の大きさの脱衣室とされる部屋の装置よりも2倍も効果的であったと述べているが、それは間違っている。1943年2月22日のトップ社の送付状（モスクワ文書館502-1-327）によると、脱衣室は排気用の5.5馬力のモーターを持っており、B-cellarは吸気と排気のためにそれぞれ、3.5馬力のモーターを持っていた。ガスによる大量殺戮用のB-cellarの換気（技術的にはまったく逆効果なのであるが）、2倍の大きさの犠牲者の脱衣用の部屋の換気よりも弱かった。」

つまり、「大量ガス処刑」が行なわれたはずの死体安置室1（いわゆる「ガス室」）の換気能力の方が、死体安置室2（いわゆる「脱衣室」）の能力よりも低いのは、不可解ではないかというのである。

「殺人ガス室」の实在性に関するマイヤーの所説を伝統的ホロコースト史学および修正主義の所説と比較しながら、整理すると以下の諸点が確認できる。

ビルケナウの焼却棟は「大量ガス処刑」の現場（＝伝統的ホロコースト史学）ではない。たとえ、その場所が「ガス処刑」のために使用されたとしても、「実験的」に使用されたしかも「失敗した」にすぎない。

「ガス気密ドア」が設置されていることは、その部屋が「殺人ガス室」として使われていた証拠（＝伝統的ホロコースト史学）ではない。なぜならば、「ガス気密ドア」、および「覗き穴のついたドア」は、害虫駆除室などのアウシュヴィッツの建築物で広く使われていた（＝修正主義）からである。

4 修正主義に対する態度 おわりにかえて

マイヤーは、自説を展開するにあたって、その多くの議論を修正主義者の研究に依拠しながらも、修正主義者との「烙印」を押されることを恐れて、他の伝統的ホロコースト史学の研究者と同様に、修正主義者のことを「民族社会主義の擁護者たち」（マイヤー）とか「ホロコースト否定派と民族社会主義の弁明者」（マイヤー）と中傷している。しかし、このようなたんなる「レッテル貼り」は別として、マイヤー論文を読めば、マイヤーはホロコースト研究における修正主義者の貢献を、「イソップの言葉」を使いながらも、高く評価していること、そして、彼を批判するピベルですら、修正主義者の研究をアプリアリに無視もしくは否定できなくなっていることがわかる。

まず、マイヤーは、政治的な理由からアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所の歴史が学術的な研究対象とはなっていないと断定している。

「歴史学では、理解できないこともないが、容認できない理由から、アウシュヴィッツが研究対象としては認められてこなかったために、宣伝がこの未知の分野に侵入してきてしまった。ソ連起源の宣伝、すなわち、アウシュヴィッツでの犠牲者400万人、40万以上のハンガリー人移送者の殺戮、焼却棟の地下室での大量ガス処刑という宣伝が、依然として世論を支配し

ている。」(マイヤー)

そして、伝統的ホロコースト史学よりも、修正主義者の方が実証主義的歴史研究を進めてきたとの評価を下している。

「...『修正主義者』は的をはずしてはいるものの、事実の詳細を精力的に集めてきた。...一方、歴史家たちは、修正主義者の説を、考察に値するもの、ひいては自説に挑戦するものと見なさずに、無視してきた。」

「イソップの言葉」を取り除いてマイヤーの議論を整理すれば、伝統的ホロコースト史学は、ソ連の戦争宣伝の政治目的に奉仕してきただけであり、修正主義者のほうがアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所に関する実証主義的歴史研究を進めてきたが、伝統的ホロコースト史学の歴史家たちはそれを無視してきたということになる。

マイヤー論文は、ピペルなど伝統的ホロコースト史学の研究蓄積をほぼ否定しているともいえるのであるから、これまでの伝統的ホロコースト史学の姿勢を考えると、ピペルは、アウシュヴィッツ国立博物館歴史部長として、「人格攻撃」(ネオナチ、反ユダヤ主義者)も含めて、熾烈に修正主義者ひいてはマイヤーを攻撃しそうなものである。しかし、奇妙なことに、ピペルの修正主義批判の調子は、修正主義者の所説を具体的に批判するというのではなく、たんに、彼らの研究の視野が狭いこと(技術的諸問題偏重)だけを指摘し、アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所の研究にはもっと広い視野が必要であることを強調するにとどまっている。

「マイヤーは、あたかも歴史的修正主義者が道を切り開いてきた、ひいては、歴史家たちをしてアウシュヴィッツ研究に取りかかることを余儀なくさせてきたと述べているようである。修正主義者がアウシュヴィッツ研究を促進した『貢献』は非常に大きいとされているが、実際には、彼らは二つの論点に閉じこもってしまっている。すなわち、犠牲者数とガス室問題である。犠牲者数については、彼らはこれをできるかぎり少ない数に減らそうとしており、ガス室については、ドイツ側青写真、文書資料のようなもっとも『客観的な』典拠資料、および物理学と化学の法則にもとづいて、ガス室の実在性に疑問を呈しようとしている。事実、修正主義者は、何名かの研究者をして、馬鹿げたことに近いようなこの論争に誘い込むことに成功した。...

しかしながら、アウシュヴィッツ強制収容所の歴史を再現する研究は、犠牲者の数、ガス室と焼却棟がどのように作動したのかという技術的問題以上のことである。この研究は、犠牲者の運命、法的、社会的、経済的、政治的、医学的諸問題から犯罪の実行犯の経歴にいたるまでの数百の問題をあつかわなくてはならない膨大な研究課題である。」

歴史的修正主義、とりわけホロコースト修正主義に関するマイヤーとピペルの見解を整理すると以下の諸点が確認できる。そして、この諸点が本小論の結論でもある。

マイヤーは、「イソップの言葉」を使いながらも、アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所研究における修正主義者の研究蓄積を高く評価しており、自分の立論にあたっては、修正主義者の研究に多大に依存している。

一方、ピペルは、伝統的ホロコースト史学のチャンピオンとして、修正主義を根本的に批判しなくてはならないという立場にあるはずであるが、彼には、もはや、プレスアックも含めて、修正主義者の所説を文書資料にもとづいて、具体的に批判する能力が欠けている。

ピペルのマイヤー批判が、まったく説得力を欠いてしまっている（マイヤー：「彼の反論はどれ一つとして説得的ではない」）のは、伝統的ホロコースト史学が、ソ連の虐殺宣伝と信憑性のない「目撃証言」だけに依拠したアウシュヴィッツ収容所「絶滅物語」に半世紀以上も「安住」してしまっ、実証主義的な歴史研究、法医学的・技術的・化学的研究を怠ってきた¹³ことの当然の帰結であり、伝統的ホロコースト史学の崩壊を象徴している。

-
- 1 *Osteuropa. Zeitschrift für Gegenwartsfrage n des Ostens*, No.5, May 2002, pp. 631-641. online : http://www.fpp.co.uk/Auschwitz/Osteuropa/Fritjof_Meyer1.html. その英訳版 *The Number of Victims of Auschwitz :New Insights due to new Findings in the Archives* online : http://www.fpp.co.uk/Auschwitz/Osteuropa/Fritjof_Meyer2.html.
 - 2 Franciszek Piper - Fritjof Meyer, "Die Zahl der Opfer von Auschwitz. Neue Erkenntnisse durch neue Archivfunde, (review article). ドイツ語版online : http://www.auschwitz.org.pl/html/de/aktualnosci/news_big.php?id=569 英訳版 online : http://www.auschwitz.org.pl/html/eng/aktualnosci/news_big.php?id=563.
 - 3 Fritjof Meyer, Replik auf Piper. online : <http://www.idgr.de/texte/geschichte/ns-verbrechen/fritjof-meyer/meyer-replik-auf-piper.php> その英訳版 Fritjof Meyer, Response to Piper. http://www.fpp.co.uk/Auschwitz/Osteuropa/Meyer_replies_engl.html.
 - 4 Carlo Mattogno, Auschwitz. Fritjof Meyer's New Revisions, *The Revisionist*, 2003, No.1. online : <http://vho.org/tr/2003/1/Mattogno30-37.html>. Carlo Mattogno, On the Piper-Meyer-Controversy: Soviet Propaganda vs. Pseudo-Revisionism, *The Revisionist*, 2004, No.2. online : <http://vho.org/tr/2004/2/Mattogno131-139.html>
 - 5 Carlo Mattogno, The Four Million Figure of Auschwitz, *The Revisionist*, 2003, No.4, online : <http://vho.org/tr/2003/4/Mattogno387-392.html>.
 - 6 ヒルバークも、ツンデル裁判で「しかし、アウシュヴィッツでの犠牲者数やソ連の損失数が宣伝目的であるとは考えていません。ただし、その数は不適切でした。正確に計算できなかったのです」と証言している。
 - 7 修正主義者のクロウエルは、カチン事件についてのドイツ側の調査について、「ドイツによる発掘と検死のやり方は徹底的かつ入念であった。ポーランド人も含む国際的な専門家が、あまり干渉を受けないで、自分の調査を進めることを許された」、「ドイツの法医学的報告は、第二次大戦中に起こった虐殺の分析のなかでもっとも詳細なものであろう」と評している。Samuel Crowell, *The Gas Chamber of Sherlock Holmes, An Attempt at a Literary Analysis of the Holocaust Gassing Claim*. online : <http://codoh.com/incon/inconshr123.html>, <http://codoh.com/incon/inconshr4567.html>, http://codoh.com/incon/inconshr8_13.html, http://codoh.com/incon/inconshr14_16.html

F. マイヤーと伝統的ホロコースト史学の崩壊

- 8 脚注41では、バトラーの『死の部隊』(1983年)から、ヘスを最初に逮捕した尋問官「クラークは、ヘスのまぶたの下に警棒をつきたてた」というテキストが引用されている。
- 9 脚注42では、やはりバトラーの著作から、「われわれはヘスの口にたいまつを押し込んだ」、「殴る音と叫び声は終わることがなかった」、「クラークは彼の囚人の顔を殴りつけた」というテキストが引用されている。
- 10 脚注46では、やはりバトラーの著作から、「もしも自白しなければ、ロシア人の手に引き渡され、銃殺隊の前に立たされるぞ。お前の息子はシベリア送りだ」というテキストが引用されている。
- 11 フォーリソンは、ヘスの「自白は虚偽である。自白は拷問によって、ヘスから引き出された。しかし、拷問を行った人物の身元確認ができ、ヘスに加えられた拷問の中身が明らかになったのは1983年のことであつた」と述べている。R. Faurisson, How the British Obtained the Confessions of Rudolf Höss, *The Journal of Historical Review*, vol. 7, no. 4.
online : <http://www.vho.org/GB/Journals/JHR/7/4/Faurisson389-403.html>
- 12 プレサックのいわゆる「39の犯罪の痕跡」の大半は、「ガス気密ドア」問題と関係している。拙稿「第二次大戦に関する歴史的修正主義の現況(5) 再考：プレサックの「犯罪の痕跡」、文教大学教育学部紀要(41集)を参照していただきたい。online :
http://www.bunkyo.ac.jp/~natasha/eupora/kiyou_35.pdf
- 13 最近のホロコーストについての研究蓄積を見ても、修正主義者の歴史研究のほうが圧倒的に多い。アウシュヴィッツ・ビルケナウ以外でも、修正主義者はマイダネク、トレ布林カ、シュトゥットホフの収容所について、浩瀚な実証主義的研究書を発表しているのに対し、伝統的ホロコースト史学では、それに匹敵するような研究書は一つもないといっても過言ではない。